

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00741

研究課題名(和文)非ネイティブスピーカー志向の第二言語学習モデルの開発

研究課題名(英文)Development of Non-Native Speaker-Oriented Model for Second Language Learning

研究代表者

山元 淑乃(yamamoto, yoshino)

琉球大学・グローバル教育支援機構・准教授

研究者番号：50468071

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：非ネイティブスピーカー志向の第二言語(外国語)学習について、インタビュー調査と分析を進め、その傾向と特徴、学習者の背景を探索した。研究当初から予測されていた以下の特徴：(1)第二言語でのキャラクタを意図的に設定して演出し、それを省察する。(2)第二言語の文化に敬意を持ち、改まりと丁寧さを重視する。(3)言語に関わらず言葉を大切に、言葉の成り立ちを意識して構造を正確に使用する。(4)伝えたいメッセージを明確に持つ。という特徴に加えて、本研究の成果により、(5)母語(第一言語)での自己肯定感の保持とアイデンティティの確立という要因がある可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究の過程で、母語話者のように話そうとすることだけでなく、特に年少の学習者については、第二言語を話すことを強制される中でネガティブな経験をする事自体が、その後の学習意欲や習得に大きな否定的影響を与えていることが示唆された。そのため、ある一つの言葉話すことを強制するのではなく、多言語やIT(アプリなど)を駆使し、その場にいる構成員を「誰一人取り残さない」ことを最優先にする「チャンプリンガル」という教育理念を打ち出した。その理念のもとに、難民の背景を持つ留学生が不登校児にSTEAM教育を実施するオルタナティブスクールを開校し、社会課題の解決にも貢献している。

研究成果の概要(英文)：Regarding "non native-speaker oriented" second language learning, we conducted interview surveys and analysis to explore their tendencies, characteristics, and backgrounds. The following characteristics were predicted from the beginning of the study:(1) Intentionally setting and directing a character in the second language and reflecting on it.(2) Respecting the culture of the second language and emphasizing sophistication and politeness.(3) Respecting words regardless of language, and using structures accurately while being conscious of the origins of words.(4) Having a clear message to convey. In addition to these characteristics, the results of this study pointed out the possibility that there is another factor:(5) Maintaining self-affirmation and establishing identity in one's mother tongue (first language).

研究分野：第二言語習得

キーワード：ネイティブスピーカー志向 ネイティブスピーカー崇拜 非母語話者 第二言語習得 質的研究 インタビュー SCAT ライフストーリー

## 1. 研究開始当初の背景

2.

従来の第二言語教育では、目標言語のネイティブスピーカー（以下 NS）が理想のモデルとされ、それに近づくことが学習の目的となっていた。しかし近年、そのような志向は NS 信仰、native speaker fallacy などと呼ばれ、それが及ぼす悪影響が様々な場面で指摘されるようになってきている。例えば、NS に対して萎縮する学習者の心理（Pavlenko 2003）や、雇用等における NNS 差別の実態（津田 2005）などの他、極端な例ではあるが、韓国で英語の発音を良くするために親が子供の舌を手術するという事態まで報告されている。また、申請者は学習者の言語習得を目標言語でのキャラクタ（定延, 2011, 若者を中心に「キャラ」とよばれる、発話や行動によって表される「人物像」）獲得という観点から分析しているが、言語学習がその人のキャラクタを変える機会となり得、NS 信仰が目標言語でのキャラクタ獲得に問題を生じさせる可能性を示唆している（山元, 2017）。

そのような動向をうけ、近年、そもそも NS とは何かを問い直す動き（大平, 2009）があり、「世界諸英語 World Englishes」を肯定的に捉える姿勢や、英語を国際共通語（international lingua franca）（鳥飼, 2011）として捉え、NS の真似ではなく「通じる英語」を目指すべきだという指摘も、小学校の英語教科化など英語教育の様々な問題と共に議論されている。

しかしながら、教育現場では「NS のように話したい」と強く願う学習者の志向を NS 教師が後押ししたり、その志向によって学習者が NNS 教師を軽んじたりする現状がある。NNS であることを悟られないほど上達して目標に近づく者も存在するが、それには高い言語適性（音韻的能力・記憶力・言語分析能力）と恵まれた環境が必要であり、目標にほど遠い現実を目の当たりにして、自己卑下に陥る学習者も少なくない。また申請者は、北米へ留学した日本人英語学習者が、周囲の NS の英語を取り入れ、本人にとっては不本意なキャラクタへと無意図的に変わってしまった事例も検討した（山元, 2018b）。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、非 NS 志向（NS 志向を持たないこと、NNS を志向することではない）のオルタナティブな日本語学習モデルを提示することである。そのために、NNS としてのアイデンティティ（以下 NNS 性）を肯定的に活かし、日本語での自己目標を達成し、日本語が話される社会の内外で活躍する日本語学習者のライフストーリーを分析し、理論化を試みる。

その際、直接的に学習経験を尋ねても、その表層的な言語化しかなされず、深く厚い語りを得ることが困難であることを、申請者はこれまでの研究の経験から実感している。そこで、日本語学習者が日本語で表すキャラクタに注目し、かれらの話し方によって表されるキャラクタという「表象」を手がかりに、幼少期からの経験を掘り下げ、根源的な学習動機に近づくことを試みる。つまり、非 NS 志向の学習者が日本語で表す、非 NS 性をいかしたキャラクタを手がかりとして、学習者自身にとっても言語化されていなかったライフストーリーを構築しそれを分析することで、非 NS 志向の学習の実態が明らかになると考える。非 NS 志向とは「所詮 NNS だから」と開き直り、誤用だらけの発話や聞き取りづらい発音を許容することでも、NS に近づかないことを目指すものでも、NS と NNS を対立軸として二分しようとするものでもない。それは、例えば「NS のように話そう」という志向と「NS の標準的な発音を習得しよう」という姿勢を混同せず検討し、異なるスタンスで NNS 性を保持するものである。NS 志向から解放されることで、学習者は萎縮せず、自己否定に陥ることなく、自らの長所を肯定的に評価して学習を進めることができると考えられる。さらに、山元（投稿中）では、非 NS 志向を持つ言語学習者が自らの第一言語の適切な使用を重視し、目標言語とその文化に対する敬意の念と謙虚さを、むしろ NS 志向の学習者よりも深く保持している可能性を示唆している。他にも、これまでの検討から、非 NS 志向の学習者には、「第二言語で表現するキャラクタへの意識」の他に、「NS が使う表現」ではなく「正統な表現」を選択したり「NS のような発音」ではなく「明瞭で通じやすい発音」を習得したりしようとする「NNS として適切な第二言語を学ぶ」姿勢、「伝えたい事柄を明確に持つ」態度、「自己肯定感・自己効力感の高さ」といった諸要因が見出されている。談話を通して発話者の NNS のアイデンティティ構築を分析した研究は多々存在するが、学習者のライフストーリーをキャラクタと NNS 性という観点から分析した研究は見当たらない。そして、NNS 性を肯定する動きはあるものの、それを健全に保持しつつ、多様な参加者による社会生活を円滑に進めるための学習モデルや指導法を提示する研究も、管見の限りない。よって、本研究はこれまでの学習者アイデンティティに関する研究の知見の蓄積を踏まえ、独自の視点から学習者理解を目指す点に学術的独創性があり、オルタナティブなモデルを構築し、そのための教材を開発するところに学術的創造性がある。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究参加者がもつ非 NS 志向について、自らの経験に対する記憶の想起と言語化を必要とする。このような、研究参加者に言語化されていない経験が基となる現象の解明は、量的研究手法の適用が困難であり、インタビューとその記録の分析によって探索的に解明する必要がある。よって本研究では半構造化インタビューによる質的研究方法を採用する。

#### 【データ採取】

日本国内の日本語学習者(JSL)と、外国語として日本語を学ぶ(JFL)学習者の両者を視野に入れ、パイロット調査として、日本とフランスで日本語を学ぶ上級以上の学習者(各 30 名以上)に対して、その NS 志向の傾向について、質問紙調査により量的に検証する。その結果にもとづき、強い NS 志向または非 NS 志向をもつ学習者(各 10 名程度)を研究参加者として選定し、半構造化インタビューによる詳細な聞き取りを行い、その逐語記録をデータとする。

#### 【データの分析と学習者モデルの提示】

インタビューの逐語記録、研究者による観察記録をデータとし、質的分析を行う。質的データの分析には、SCAT (Steps for Coding and Theorization)(大谷, 2011)を用いる。SCAT は 4 つのステップでテキストを精製して構成概念を構築し、ストーリーライン及び理論記述を構成する質的データ分析手法であり、医療教育や第二言語学習などを中心に幅広い分野で使用されている。

SCAT の分析によって得られた理論と概念構成図を用いて、学習者のライフストーリーを再構築し、NS 志向の学習者との比較を行いながら、かれらが NS/非 NS 志向を得るに至った過程と背景に関わる要因を分析し、非 NS 志向の学習モデルを提示する。その後、質的調査研究によって得られた学習モデルをもとに「NS 志向/非 NS 志向」自己診断尺度を作成し、アンケート調査によって量的検証を行い、理論の一般化をすすめ、教材開発につなげる。

## 4. 研究成果

非ネイティブスピーカー志向の第二言語(外国語)学習について、インタビュー調査と分析を進め、その傾向と特徴、学習者の背景を探索した。研究当初から予測されていた以下の特徴：

- (1) 第二言語でのキャラクタを意図的に設定して演出し、それを省察する。
- (2) 第二言語の文化に敬意を持ち、改まりと丁寧さを重視する。
- (3) 言語に関わらず言葉を大切に、言葉の成り立ちを意識して構造を正確に使用する。
- (4) 伝えたいメッセージを明確に持つ。

という特徴に加えて、本研究の成果により、

- (5) 母語(第一言語)での自己肯定感の保持とアイデンティティの確立

という要因がある可能性を指摘した。ネイティブスピーカー志向に陥る第二学習者には、第一言語で自己否定につながる経験を持ち、自己肯定感が低いケースが多くみられる。そのため第二言語で「別人」になることを無意識に希求し、そのことが「ネイティブスピーカーのように話したい」という強すぎる思いにつながることで、複数名のインタビューの質的分析により、明らかになりつつある。逆に、非ネイティブスピーカー志向の学習者には、自己肯定感の高いものや、過去に自己否定を引き起こす経験があっても、別の方法でそれを克服し、自己のアイデンティティを構築しているケースがみられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山元淑乃	4. 巻 24
2. 論文標題 移動する子どもによるキャラクタの獲得 日加米日と移動したヒロのライフストーリーより	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	6. 最初と最後の頁 104-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山元淑乃	4. 巻 17時
2. 論文標題 非ネイティブスピーカー志向の第二言語習得：日本人英語学習者Aの語りの分析を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化教育研究	6. 最初と最後の頁 360-382
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14960/gbkkq.17.360	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山元淑乃
2. 発表標題 退避アフガニスタン人に対する教育実践
3. 学会等名 沖縄と世界の社会課題を考える『Peace & Democracy Forum 2022 ~当事者として平和と民主主義を考える~』（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山元淑乃、石川隆士、新城直樹、當間千夏
2. 発表標題 琉球大学の日本語教育と地域貢献ー誰ひとり取り残さないチャンプリンガルによる留学生×日本人学生×地域を混ぜる共修教育ー
3. 学会等名 琉球大学日本語教育シンポジウム 沖縄から始まる持続可能な共生社会 ”誰ひとり取り残さない”時代を見据えて
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	大谷 尚  (otani takashi)  (50128162)	名古屋経済大学・人間生活科学部教育保育学科・特任教授   (33923)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------